The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「世直し」ノオト（2018年度・夏）
Author(s)	池田, 光穂; 井上, こう; 今井, 泉 他
Citation	Co＊Design. 2019, 4, p. 21-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71352
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「世直し」ノオト（2018年度・夏）

池田光穂（大阪大学COデザインセンター）、井上こう（国立民族学博物館外来研究員）、今井泉（大阪府立大学獣医臨床センター）、岡野彩子（大阪大学COデザインセンター）、上條美代子（看護師）、北村敏泰（ジャーナリスト）、滝奈々子（京都市立芸術大学芸術資源センター非常勤研究員）、林田雅至（大阪大学COデザインセンター）、宮本友介（大阪大学人間科学研究科）、山森裕毅（大阪大学COデザインセンター）

“Yonaoshi” Note (Summer semester 2018)

Mitsuho Ikeda (Center for the Study of Co* Design, Osaka University), Ko Inoue (Visiting Researcher, National Museum of Ethnology), Idumi Imai (Veterinay Medical Center, Osaka Prefecture University), Ayako Okano (Center for the Study of Co* Design, Osaka University), Miyoko Kamijo (Nurse), Toshihiro Kitamura (Journalist), Nanako Taki (Researcher, Archival Research Center, Kyoto City University of Arts), Masashi Hayashida (Center for the Study of Co* Design, Osaka University), Yusuke Miyamoto (Graduate School of Human Sciences, Osaka University), Yuuki Yamamori (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)

このノオトは、2018年4月25日に産声をあげたばかりの「世直し研究会」に集う大学内外の参加者が、この研究会での対話をもとに、じっくり考えて綴った「ノオト（notes）」である。「世直し研究会」は、2006年4月から2016年3月まで大阪大学コミュニケーションデザインセンターにおいて開催された「現場力研究会」の後継組織として発足した。世の中の理不尽や不条理から目を逸らすことなく、「世」のあるべき姿を問いつつ、具体的な現場での課題に取り組む力を養い、「世直し」へと繋げていくことを期待したい。今回は、2018年度前半の研究会における対話から編み出された、10編のエッセイを紹介したい。
「世直し研究会」と「現場力研究会」については下記URL参照。

世直し研究会：https://goo.gl/hvkRBz　　現場力研究会：https://goo.gl/cPYDEv

キーワード ―― 世直し、対話、行為

Keyword ―― Yonaoshi, dialogue, action

1　世直し研究の「思想」について考える

僕は世直しという言葉を冠したら?と研究員の岡野彩子さんに提案したところ、彼女はそのまま研究会として組織してくださった。世の中の矛盾や理不尽について考える大学と市民の集いを続けてこられた岡野さんにまず感謝したい。僕がここで言いたいのは「社会問題」や「革命」ではなく他ならぬ「世直し」という用語をなぜ提案したかということである。結論を先に言えば「世直し」にある徹底的にナイーブな純粋さと、あらゆる政治的プログラムに含まれるようなずる賢さ（狡知）の欠如という性格に僕は魅了されている、そのことである。世直しは良い意味でも悪い意味でも、つねに現在時（Jetztzeit）に係留されており、その顔は未来に向けられている。

さて岡野さんは、ルター派の牧師ディートリッヒ・ボンヘッファー（1906-1945）の研究家であると同時に、ナチスドイツの強制収容所の中でドイツ降伏の1ヶ月前に処刑された、この思想家の「現代的意義を問う」宗教研究者でもある。ボンヘッファーは牧師でありながら一方でガンジーの非暴力抵抗の思想に共鳴しながらも、ヒトラー暗殺計画に関わったのは、ナチスドイツに翻弄されたユダヤ人を含む名も無き政治的暴力の犠牲者への共感と義憤ゆえである。そして逮捕後の短い期間の深い思索と相まって「剣をもって抵抗する」ことの意味についても徹底的に考えた。ゆえに彼は世直しの思想家だ。ボンヘッファーを語る岡野さんは、彼を歴史の中に留めておく後ろ向きのタイプの研究家ではない。ボンヘッファーを見る彼女こそが、現在時から未来に向けて考える人である。

ところで大阪出身の人なら世直しと聞くと、やはり反射的に想起するのが大塩中斎（平八郎，1793-1837）であろう。中斎は儒学者（陽明学）であると同時に奉行所の与力――今の刑事行政と司法と警察がミックスした執行官――であったが、義憤に燃える孤高の人であったのか、今でいう奉行所の内部告発を果敢におこなった人だ。他方で切支丹禁制後二百年以上経っているにもかかわらずその異端の探索と摘発を行った人でもある。与力引退後に平八郎の乱の蜂起と失敗で自害するが、最初から反骨の抵抗家だったわけではなく、元与力として人脈を使って最後まで行政や豪商に助言をおこない、天保期の飢饉の回避のための努力を続けていた。彼が独学で修めた陽明学は幕府の朱子学からみれば異端であり、また蜂起の直前における軍事訓練の名目は、他の地方で発生した民衆叛乱への鎮圧目的であると周囲には説明していたらしい。周到な政治プログラムを立てるマルクス主義の革命家と大いに異なり、大塩は体制側の人間であり、最後の最後まで自分の武力を蜂起に使うのか、それとも民衆叛乱の鎮圧に使おうとしているのか不明な人物である。

僕が「世直し」という言葉に魅了されるのは、この宙づりの緊張感と、現在時に呪縛され何とかしなければと具体的に「ことおこし」する際に向かう顔が未来を向いているからなのである。

（池田光穂）

世直し研究会の設立経緯を記載したURLは https://goo.gl/VNpNw9（短縮URL）にあります。

2　よりみち日暮らしがいい

ここ世直し研究会というささやかな場に参加して、世直しというのは大それた言葉かもしれないが、あらためて、自分の身の回りからの世の中への関わり方はどんなものだろうか、考えてみたい。

世間の何事かにつよい関心をもつこともあるが、あまり持続せず、深く考えないうちに別のものに関心が移りやすい。それに、無思慮や保身から人と人の大切な関係をそこなって後悔したことも多々ある。そういう自身のあり方を反省しながらというか、残念ながらそういうことをこれからも繰り返しそうな道の半ばで、考えを一歩進めることになればいいと思う。

そうなればいいという言い方をするのは、思い浮かべる、感じる、ああしようこうしようと考えることに、一貫した意志をもちつづけることを難しく感じるからだ。

けれども、思い浮かべ、感じ、考えるどんなことに親近感、もしくは疎遠な感じをいまもっているかは、肌感覚のようなものでいつもなんとなく自覚している。言い換えれば、身近なもの縁遠いものは絶対的な遠近をもっているわけではなく、ときどき、より多くのことが身近に感じられる。そういう時は、自分が宙ぶらりんでよくて、将来設計のないその日暮らしのなかで漂い流されていくリズムをいくらか楽しんでいる時だ。話が身勝手に飛躍しているが、これはけっこう大切なことに思える。

世直し研究会では、自身も苦しみや悩みをもち、さらに他者の苦しみも分かち合おうとする人のいとなみがしばしば話題にのぼる。圧倒的なつらさがあり、つよい意志でぎりぎりの努力をしている人たちがいる。その核心のことではないが、それを伝え聞いて苦しさにひるまないために、私はむしろ意志とは別の思いのあり方があると思う。

私は人生を設計しようと頑張ってしまうと、とかく周りを「因子」のように捉えてしまう。「因子」としての苦しみは遠ざけたいものでしかない。しかしこれはけっこうさびしい発想だ。私にはこれまでの人生を設計の態度で頑張った跡がいくらかあり、へたで身になじまなかっただけかもしれないが、その部分の跡はなんだか荒涼としている。

反対に、その日暮らしでもいいやという気分のなかでは、五感がよりみちに走り、周りの人、風景、ごちゃっとした物などの表情を味わっていることがある。そういう時、意志で頑張ったわけではないが、苦しみは、「因子」ではなく、言葉や身体の馴らし方でなんとかつきあえて、遅効性の力になることがある。

やがて赤ん坊の首が据わるように、よりみち日暮らしの人の生き方が世の中に据われば うれしい。そっちに一歩いくには、えーと……。

（井上こう）

3 「面倒くさい飼い主」、この言葉に心がざわつく

私は、動物病院を現場として仕事をしている。仕事をしている中で、職場で「面倒くさい飼い主」という言葉を耳にするとき、私は心がざわつく。『面倒くさい』といわれる理由は、話を聴かず一方的に要求をしてくる、獣医師やスタッフに不安や場合によっては怒りをぶつけてくる等、様々である。この言葉は、診察対象の動物ではなく、人である飼い主に対してその言葉は向けられている。

私は夜間動物病院で10数年間仕事をしていた。そこには、様々な事情で深夜の動物病院を受診する人（多くは飼い主）と動物の存在があった。飼っている動物が事故に遇い駆け込む飼い主は、何とかしてくれと一方的に要求をしてくる。その事故に関わる車を運転していた人は、リードも付けずに夜中に散歩することは飼い主の管理ミスではないのかと不満や場合によっては怒りをぶつけてくることもある。深夜の動物病院は、言ってみれば「面倒くさい飼い主」が多く来る場所なのかもしれない。夜間動物病院は多忙であり「面倒な現場」でもあった。年中無休深夜から早朝まで診療している病院は当時大阪府下でも数件、年末年始などは、野戦病院の様相に、急変した動物が1時間近くかけて来院した時には救えない……「今日は死亡来院（到着までに心肺停止状態）がなくてよかったなぁ」などと終業時に会話をすることはあったが週に3日もあれば良い方、そのような現場だった。

「面倒な現場で仕事を続ける限り、面倒くさいことは失くし（直し）て行かないとしんどいばかり」そんなおもいに駆られて、コミュケーションに関する知を求めて、ここ数年大阪大学を含め様々な場での学びを進めて来た。そのなかで現場力研究会（世直し研究会の前身）へのお誘いを受けて参加するようになった。2016年から獣医科大学でもコミュケーションを意識した医療面接がコアカリキュラムになり、私の現場においても、獣医コミュケーションとして関心が向けられる機会が増えつつある。医療面接の学びの中で『解釈モデル』という概念も知った。『面倒くさい』は飼い主と獣医師の『解釈モデル』に差があることも一つの理由であることも学んだ。

私は「面倒くさい飼い主」という言葉に、「先生は何についてそう思うのか?　飼い主さんはどう思っているのか?」と自分の『解釈モデル』を通して心をざわつかせている。

（今井泉）

4　世直し人 ――ルターの場合――

マルティン・ルターに始まる宗教改革は昨年500周年の節目にあった。「宗教改革」の原語はドイツ語のReformationでラテン語のre（再び、元に）とformatio（形成すること）に由来する。つまり本来あるべき姿に立ち戻ることであるから、「原状回復」すなわち「直す」という意味を含み、「世直し」と通底する。一般にはルターに始まる16世紀前半の歴史的事件とされることが多いが、実際には17世紀半ばまで続く長期の闘いで三十年戦争の終結にまで至り、個人主義文化や近代国家の成立、資本主義の勃興に寄与した幅広い社会史的現象であったといわれている。

しかし若きルターが95か条の提題をもってプロテストした時、徹底した社会変革を意図していた訳ではない。過激な改革を指導したとされるトーマス・ミュンツァーのような人物とは異なり、ただ贖宥状などを巡る解釈を疑問に付し、神学的議論を望んだのである。だがルターの解釈は、聖域を越えて世俗権力の思惑や政治的・経済的抑圧に喘ぐ民衆の怒りとも結びつき、彼の予期せぬ展開を見せた。そしてドイツ農民戦争に際しては、世俗統治と霊的統治を明確に区分する「二王国論」に立って反乱農民に自制を求めるが受入れられず、急遽「盗み殺す農民暴徒に対して」を執筆して諸侯に鎮圧を訴えた。「哀れな領民達に慈悲を与えよ。可能ならば、刺し、打ち、絞め殺せ」（Luther［1525：361］）と。

ルターの対応が神意に添うものであったかどうかは人知を越えるが、これに関連して、ゲーテの『ファウスト』にでてくる「人間は努力する限り迷うものだ」という有名な言葉が頭を擡げる。ただしここで「迷う」とされているirrenという動詞は、むしろ「思い違いをする」といった意味のほうが近い。主人公ファウストは『ヨハネ福音書』冒頭の「はじめに言葉ありき」をギリシャ語からドイツ語に訳す場面で、確信して「はじめに行為ありき」に書き換える。確かに行動の人ファウストはたびたび踏み迷う。しかしそもそも行動を起こさなければ過ちを冒すこともない。少なくともルターは、人間は誤るものだと深く認識していた人だった。それゆえに人は行為義認ではなく「信仰のみ」によって罪を赦され正しい者と認められると説いたのである。

現代ドイツ人にとってもルターは特別な存在なようだ。ドイツZDFのテレビ番組『ウンゼレ・ベステン』で行われた「最も偉大なドイツ人」を選ぶ330万票を超える視聴者投票の結果（2003年11月28日）、旧西ドイツの初代連邦首相アデナウアーに続いて第2位であった。一修道士がヴォルムス帝国議会において――異端として火刑に処せられるかも知れぬのに――自らの良心に従って自説を撤回せず、伝説によれば「我ここに立つ」と言い放ったとされるその姿は、やはり多くのドイツ人を魅了してやまない。

引用文献

Luther, Martin（1525）*Wider die räuberischen und mörderischen Rotten der Bauern.* In: D. Martin Luthers Werke. Kritische Gesamtausgabe. Bd.18.（1908）, Weimar: Verlag Hermann Böhlaus Nachfolger.

（岡野彩子）

5　世直しのために ――何者でもなくなってからも話をしよう――

高校の入学祝いに文春新書『僕たちが何者でもなかった頃の話をしよう』を姪の息子に贈った。ノーベル賞の山中教授、カンヌ映画祭で最高賞受賞の是枝監督ほか各界のトップランナーの講演と永田和宏教授（歌人・細胞生物学者）との対談集である。「みんなキラキラして凄過ぎた。僕はきっと何者にもなれないままだと思う」とクールに語る15歳の彼に、「触発されてよ。なんて軟弱なの!」と呟く。研究会では活字だけでは臨場感が伝わり難く、人や本との出会いを願うが、ローモデルやメンターを求めない時代なのだろうか、と話した。

私は「看護部長100人プロジェクト」に関わり、退職後の元看護部長たちに、推挙の経緯、困難例、やりがい・貢献例、職位からの学び、次世代に伝えたい事等をインタビューしている。100人の知的財産である経験知を形式知として体系的に残すことにより、可視化、現在及び次世代看護部長の支援に資する事を目標にしている。皆イキイキ語りよく整理されている。トップは方向性を見定め、発信、統制・牽引する。退職してもオーラは半端なく、社会や続く人たちの役に立ちたいと願い行動する。職業病かもしれない。

ひとは朱夏から白秋期に入り、所属や基盤の喪失や変遷を経験し深みを増す。そして私である。公務員から民間へ、医療系から福祉・介護系への過程は路線からの脱落とか離脱とか言われた。施設長の職位から「普通のおばさんになります」と還暦退職したが、ハードルが高かった。実績も自分の力と自負していたが、多くの支援や支持をもらい厚生技官や役職のポジションパワーが効いていたようだ。超小柄な身の丈を知っていたつもりが身の程知らずだった。「くだり坂には　またくだり坂の　風光がある」とつぶやいてみるが寂しい。竹原ピストルは、「あの頃は…あの頃は…」と、過去の栄光や業績を撫で続け、胡坐をかくことを止め、積み上げて来たものと勝負しようと歌い、私を励ます。つまり過去現在を踏まえ、未来への挑戦、自身への挑戦を促しているのだろう。

高校生の彼もお節介おばさんの私も持続可能な社会をめざす当事者同士だから、先ずは「何者でもなくなってからの自身への挑戦（あがき）の話」を彼にしてみようと思う。聞いてくれたら特典（フライドチキンとお小遣い）があると釣ってみようか。

引用・参考文献

榎本栄一（1998）日めくり法語カレンダー『凡夫のつぶやき』真宗大谷派宗務所出版部.
山中伸弥ほか（2017）『僕たちが何者でもなかった頃の話をしよう』文藝春秋.
竹原ピストル（2012）「オールドルーキー」『ROUTE to ROOTS』よしもとアール・アンド・シー.

（上條美代子）

6　オウム真理教事件で考える「いのちと宗教」
――世直し研究会レビューの「序」として――

この7月、オウム真理教の一連の事件で、教祖の麻原彰晃死刑囚ら幹部7人が処刑された。「宗教」の名の下に行われ日本社会を揺るがせた凶悪事件は、だが真相が解明されないままだ。国家が人命を奪う「死刑」という形が実行されたことで、特に宗教界には更なる問いが発せられたとも言える。

死刑を「重大な人権侵害」とする日本弁護士連合会が「再審請求中や心身喪失の疑いのあるものも含まれる」と抗議声明を出した。筆者が取材対象として来た宗教界にも死刑制度に反対しこれまで執行の折に批判声明を出した教団が多いが、それは刑事司法体系に関わる見解というよりも、多くの宗教が「いのち」を「絶対的」価値として「殺すなかれ」と唱える、信仰の根幹に基づくものだ。その立場からは今回の処刑をどう受け止めるのか。犯罪事実が確定し被告が極悪だからといって判断が異なるならば「絶対」とは言えないだろう。

一方、津久井やまゆり園事件もそうだが、その「いのち」が全て等しく重みに差はないという宗教的理念からすれば、無差別に多くの人を殺めた者への報いや罰をどう考えるか。ここで「正義」を持ち出すならば宗教的な問題はなお複雑になる。社会的な「正義」ほど相対的で曖昧なものはなく、ある正義や倫理を絶対化するには、その根拠に神や仏を据えるしかないからだ。

他方、松本サリン事件で妻を殺害されながら犯人扱いされた河野義行さんは実行犯たちへの“許し”を語った。「した事をどう反省し総括するかはその人の心の中の問題。恨むという無駄なエネルギーを使って限りある自分の人生を無駄にしたくない」との言は感銘を広げもしたが、重い罪を犯した人間への宗教的な「赦し」はまた違う。一体、誰がどんな根拠で赦すのか。神か仏か。同じ人間である宗教者には、それを受け入れられるのかどうか姿勢が問われる。

事件よりはるか以前に今回処刑された新実智光を取材した際、教祖への信仰を輝く目で語るその態度、同様の信者が数多く集うことに強い違和感を抱いた。彼は控訴審でも地下鉄サリン事件を「救済の一環」と「尊師」への絶対的帰依を改めなかった。若者がなぜこのような宗教に駆り立てられたのか。オウムを殲滅すれば済むことではなく、「いのち」の格差が広がり生きにくい社会を世直しすることが大事だ。逮捕された信者の「（苦悩を抱えた時に）寺は風景でしかなかった」との供述に危機感を募らせて、寺を地域に開き自死防止活動など様々な社会的取り組みを始めた僧侶もいる。筆者が「いのち」の報道のために宗教を取材する理由もそこにある。

（北村敏泰）

7 音楽というきしみ

筆者の専門分野は民族音楽学（中米地域）であるが、実生活ではピアノ講師も務める。世直し研究会では、各々の関心事を分かち合いながら、前進するという営みが行われている。本稿では、わたしと音楽の軌跡に触れながら、音楽と関わる際に生じるきしみがいかにして「世直し」と繋がる可能性があるのかを手探りをしながら論を進めたい。

日本では、そろばん、英会話と並び、ピアノが定番の習い事として位置付けられ、わたしも習い事の先生としてピアノを教授している。しかし何故だか、アカデミズムのなかに身をおくと、自分がピアノの先生であることを隠蔽したい気分になってしまうのである。学術界においては、音楽（音）の民族誌を語ることに焦点を当てる一方で、ピアノの先生としてときには音楽の文脈を排除しているというあり方が、アンバランスなような気がしてならない。何かきしみを感じる。

わたしは親の西洋文化中心思想教育の結果、中学校から大学院まで生粋の西洋音楽専門学校でピアノを専攻していた。小・中学校時は何の疑問も持たず、演奏の上達を目指し、1日に8時間ほどの練習を繰り返していた。しかし、高校の途中から西洋音楽のみを学習することの偏り、危うさを感じ始め、特に平均律など何も世界共通言語ではない様な音律を叩き込まれることの違和感はとてつもなく苦痛だった。

そして、その頃から音楽を、「民族音楽学」だとか「西洋ピアノ音楽」などと無意識的に分断してしまうわたしの思考は脆弱すぎると危惧しはじめた。音楽を地域やジャンルで細分化することなく、世界の人間の活動として広い地平に置くという考え方が民族音楽分野では共通する概念であることを知ったのもこの頃である。

大学へ入り、その思いをピアノ教授にぶつけると、一笑に付されてしまい、とにかく、地域やジャンルに音楽に左右されない音楽を学びたいと痛切に願いつつも、ピアノ科を修了した。その後、国内外の大学院でいわゆる民族音楽学を学ぶ機会を得て、博士論文を中米グアテマラのマヤの人びとの音楽事象についてまとめ、現在大学では民族音楽学領域の研究員を務めているが、しかしわたしの中に深く植え付けられたピアノ奏者の自己は、民族音楽学を学べば学ぶほどに強く際だたされる。

世直し研究会の多角的なコミュニケーションにおいては、音楽に対峙する際に少しずつ植え付けられたきしみを閉ざすのではなく、自問しつつも開いた問いとして紐解いていきたい。

参考文献

徳丸吉彦（2016）『ミュージックスとの付き合い方：民族音楽学の拡がり』左右社.

（滝奈々子）

8　いのちをぼうにふらせるな！　――反・生命の物象化――

この数年間外国人技能実習生問題を取り巻く労働環境・労務管理の点から、監理団体などへの批判がメディアを通じてなされているが、実は一体的な衛生環境・健康管理については未だ大きく取り上げられることはない。

この数年間、首都圏などを中心に、全国規模で見られる、アジアの結核高度蔓延国諸国（ネパール、ミャンマー、ベトナムなど）からの技能実習生らに対する「監理団体」による健康・衛生管理、労働環境・労務管理の不徹底に起因する「感染症（結核）発症」という喫緊の課題について、今後大阪においてG20や万博誘致事業の展開に鑑みた施策を講じる必要性がある。

大阪市保健所によると、大阪府は府内の外国人技能実習生の世話をする「監理団体」「日本語学校・各種専門学校」に対するアンケート調査を過去に実施しており（複数団体は回答せず）、今回、さらに大阪府が「監理団体」「日本語学校・各種専門学校」に対する「健康教育資料」を作成中である。

「関西SDGs（持続可能な開発目標）プラットフォーム」感染症関連の取り組みとして、今後その「健康教育資料」の内容に沿って、「監理団体」「日本語学校・各種専門学校」への資料送付後、健診・患者発生時の対応などについて、「努力義務化」――実施せずをよしとする悪慣行――せずに、実際に実行されているかどうか、公益財団法人「大阪公衆衛生協会」が行動主体として確認することになった。

この「努力義務化」については、これまで外国人労働について、雇用現場で日本人と外国人の間でコミュニケーションを円滑に図るために就業時間内に、互いの言語を学び合うことが法的に努力義務化することが雇用者に求められたものの、それは企業間で原則実施しなくてよいという仲間内の約束事となっており、労働災害においても、外国人に不利にならないために通訳者の存在が不可欠であるはずなのに、それもやはり「努力義務化」する悪慣行が横行している。

すでに外国人技能実習生の結核発症問題で、通訳者の手配が後手に回っている事実が散見される。本来ならば、「監理団体」が労働者として受け入れる際に、通訳者の配置に大いに配慮すべきところである。現代の「山椒大夫」たちにどう立ち向かうか、今後適切な対応が待たれる。荘園領主が経済外的強制によって農民たちを厳格に処罰する封建社会にあって、説話の中に存在する「厨子王」によって、また応仁の乱世、「世直し」できぬ小さき民人、庶民たちは一寸法師や桃太郎などの登場する「御伽草子」の語り口を通して溜飲を下げざるを得ない時代は今は昔である。非日常的な論理ではなく、外国人技能実習生問題は、現実世界の中で、グローバル・スタンダードな解決の糸口を見つけたいものである。

参考文献

結核予防会疫学情報センター：結核発生動向概況・外国生まれ結核（結核年報2017）：
http://www.jata.or.jp/rit/ekigaku/toukei/nenpou/　（2018年7月18日閲覧）

（林田雅至）

9 「なおす」と「しまう」

「世直し」という言葉は、字義的には似た「社会改良」（social reform）といった言葉とは違い、堅苦しい漢語ではなく、どこか純朴さを感じさせる和語（やまとことば）だ。これは常に翻弄（ほんろう）される側から発せられるということに起因しているのではないだろうか。

「世直し」といえば、江戸幕府から明治政府への体制転換へとつながった、いわゆる「世直し一揆（いっき）」が想起されるが、その矛先は新旧両体制すなわち翻弄する側へと向けられていた。「世直し」は支配階級が取って代わるということを含意しないのだ。また、近世以前においては、「世直し」は天災などの凶事を打ち払うための呪（まじな）いのことを指しており、「験直し・縁起直し」といった言葉と同義であったらしい（須藤［2004］）。天災のような「どうしようもない相手」を前にしては、飾り立てている閑はなかったのである。こうした「世直し」の元来もつ呪術的な響きも忘れてはならないだろう。

ところで、西日本の方言では「直す」という言葉を「しまう」と同じ意味で用いることがある。「直す」の語義は「元の（良好な＝正しい）状態に戻す」であるが、たとえばある道具がその機能を果たしうる状態に戻すことであれば「修理する」という意味になり、また仕事を終え安置された状態に戻すことであれば「しまう」という意味になる。

「しまう」といえば、いがらしみきおさんの漫画作品「ぼのぼの」に登場する「しまっちゃうおじさん」だ。主人公ぼのぼのは、「ジリツできないとどうなるんだろう?」と考えているうちに、しまっちゃうおじさんに「どこかにしまわれてしまうんだろうか」と妄想する。ただし、しまっちゃうおじさんは決して「悪い子だからしまっちゃおう」とは言わない。何が正しく何が悪いかは、ぼのぼのの妄想の外側に置かれている。「世直し」を唱えるときにも、ほんの少しだけぼのぼのと同じ気分になる。「どこかに直されてしまうんやろか」と。

参考文献

須藤隆仙（2004）『世界宗教用語大事典』新人物往来社.

いがらしみきお（1988）『ぼのぼの 3』竹書房：37.

池田光穂（2015）「しまっちゃうおじさんのこと：超自我（S. Freud, 1923）とのコミュニケーションデザイン」：http://osku.jp/u0093（2018年7月17日 閲覧）.

（宮本友介）

10 質問をデザインする

授業やイベントなどで「何か質問ありますか」とたずねると居心地の悪い沈黙が流れ、ときにはそのまま授業やイベントが終わってしまう。自分も質問できないときがあるので、そのことで学生や参加者を責めるつもりはない。逆に「なぜ質問ができないのか」という疑問が湧いてきて楽しくなる。

学生に聞いてみたところ、質問しない・できない理由は次のようなものである。

(1) 人が多いところだと恥ずかしい／遠慮してしまう／バカにされそうで怖い

(2) 頭を整理するのに時間がかかる

(3) 聞きたいことがない／疑問がわかない／好奇心がない

(4) 質問しないと授業が早く終わるから

ここで掘り下げてみたいのは(1)である。確かに質問するというのは頭の良し悪しが露わになる場面であり、失笑・嘲笑される可能性もあってプレッシャーが高い。このプレッシャーを乗り越えるにはどうすればいいのだろうか。端的に答えるなら、バカにされない質問を作れるようになればいい。つまり良い質問ができるようになればいいのである。しかし良い質問が何かを私たちは知らない。それもそのはずで、そもそも私たちは質問に答えさせられるばかりで、質問をするトレーニングを受けたことがないのだから。私たちの質問力は大学教育に至ってもまだ未開発状態に留まっている。

では、良い質問とは何だろうか。私が使っている基準はこんな感じである。

・良い質問とは、

(1) 答えが出せる質問である。私たちの質問が失敗するのは多くの場合、相手が答えられない質問をしてしまうときである（答えられない理由はさまざま）。

(2) 良い答えが出せる質問である。質問はその答えを良くも悪くも限定する。質問を受ける人が良い答えを出せるような質問は良い質問である（答えに失敗することもありうるが）。

(3) 自分の知識や認識が拡張（更新）されるかもしれない質問である。情報収集的な質問や確認のための質問も必要だが、その答えを聞いて肯定的な驚き（発見）があるような質問が良い質問である。

(4) 自分だけでなく、質問された人も含めたその場全員の知識や認識が拡張（更新）されるかもしれない質問である。その質問を共有した人々に肯定的な驚きがあるような質問が良い質問である。

このように良い質問の基準を定めることができれば、バカにされるかもしれないという漠然とした不安に打ち勝つことができるようになる……かもしれない。

（山森裕毅）

（投稿日：2018年7月31日）

（受理日：2018年10月17日）